

丹沢山塊（HPのトップに掲示してあります）には、希少な鉱石を含め多種多様な地下資源が埋蔵されています。しかし、採掘し商業化するためには、相当量の鉱脈と鉱石の運搬手段が整っていなければなりません。

東京鉱山監督局鉱山鉱区一覧によると、丹沢山塊から出土する鉱物の試掘届、古くは明治末に始まっています。届け出によると金、銀、銅、硫化鉄などの試掘の届けが出されています。丹沢に金鉱脈の存在か？ 併せて銀、銅も試掘対象に挙げられていますが、あくまでも届け出で段階のことで、これらの採掘の記録はありません。

鉱山資源の試掘について、横浜貿易新報（現在の神奈川新聞）に、次の記事が掲載されています。

大正7年（1918）3月20日

一町九ヶ村の死活問題 春嶽山中のマンガン鉱発掘不許可請願（満庵鉱）

中郡東秦野村春嶽山にマンガン鉱の存する見込みをもって高座郡藤沢町の竹内重太郎他一名より試掘願いを其筋へ提出せるが右は中郡東秦野、秦野町、大根、土沢、金目、城島、岡崎、豊田、金田、旭の一町九箇村の死活に関する一大問題なるより去る18日一同の連署の上中郡長、本県知事、鉱山局長宛にて左記請願書を提出したり

△ マンガン鉱試掘に関する請願 神奈川県中郡金目村他九箇町村

神奈川県中郡東秦野村春嶽山保安林は金目川水源に位し本郡耕地の大半に灌漑すべき水源涵養上至大の関係を有するものなるに係らず林相次地に荒廃して疇昔の觀なく各地に崩壊して山骨を露出せんとする形状に候處明治四十五年当局の命令に依り関係町村協議の上所有者と一百六十年間地上権取得の契約を締結し地盤保護工事及植林を為し以て金目川の氾濫を防止すると共に其水源涵養の目的を達せんことを期し爾後大正六年迄に当局の補助を仰ぎ1万余円を投じて百二十町歩を植林し及び荒地保護工事を実行せり、然るに今回本県高座郡藤沢町竹内重太郎他一名より春嶽山に關しマンガン鉱試掘願いを提出候趣き有之為めに關係長村民に於ては其意外なるに驚き候實にや該山は水源涵養上我等が唯一の生命なるに拘らず之を試掘せらるる場合あるときは水源枯渴し大に灌漑の不便を蒙り土砂流出して洪水氾濫を免れざると同時に総て植物に鉱毒の害を被るの恐れある為關係長村民に於ては日夜憂慮措く不能の形勢有之候に付き事

情御賢察の上該山に於けるマンガン鉱試掘願の儀は特別の御詮議を以って御許可無之様御取計らひ被成下度関係町村長連署を以て此段請願候也

● 金目川の水源地帯、春嶽山に存在するマンガン鉱の試掘許可願いが出されました。事態を重く見た金目川の水を利用し水田耕作を続けている町村からの試掘の断念を求める請願が出されました。

もとより、春嶽山腹は金目川の水源地であり、この地域が荒廃することは、山林地の自然崩壊を招くとともに、農業用水の安定的な供給が困難となってしまいます。開発の結果は、洪水が多発し農業生産にとって多大なダメージをもたらし、金目川流域に住まう人々の生活破壊につながると指摘されました。このため、金目川の水を利用している町村と、土地の所有者との間で、地上権設定の契約が結ばれ、水源涵養の保安林を維持する植林を行うことも決定されました。明治 45 年のことでした。

金目川の水源地帯は地域住民の生命線でした。大正 7 年、その土地にマンガン鉱の試掘は許すことができなかったのです。

横浜貿易新報には春嶽山のマンガン試掘を追う記事は見つかりませんでした。

● 丹沢山塊の鉱物資源の開発は明治時代の末ごろからです。早い時代から着目されていたこととなります。

資料的には、1933（昭和 8）年以降、丹沢山塊の鉱山開発が進展して行きます。特に昭和 10 年代になり、政府の対外戦争の拡大に合わせ、丹沢は「一大探鉱ラッシュとなった」との指摘もあります。

堀井喜一氏は、丹沢の新大日岳の山腹斜面の大日鉱山の試掘届をほぼ毎年提出しています。試掘の地下資源は金、銀、銅、硫化鉄があげられていました。これらの届け出資源は、あくまでも名目的であり、試掘許可が得やすい資源であったとの指摘もあります。

昭和 18 年、金鉱山整備令が出され、戦争により海外取引、貿易が縮小され対外決済に使われていた金よりも、日本にとって戦争に有益な銅、鉄、亜鉛、マンガンなどの鉱産物の生産の増加に転換されました。丹沢山塊の地下資源への注目度も高まりました。

本格的な戦争の時代を反映し、国による鉱山管理が厳しくなり、一般人、ハイカーの現場への立ち入りが制限されたともいわれています。

戦後の記録です。

昭和25年(1950)6月14日

世に出る“丹沢のマンガン” 三十年間は採掘 操業開始の準備進む

神奈川の屋根“丹沢”の一角から今後30年は掘れるというマンガン鉱が近く一企業により採掘される計画が立てられているがこれが夢でなく実際に成功すれば丹沢開発の理想は一步前進するわけで地元中郡北秦野村の有志も今秋までにはまとまるものと大きな期待をかけている

マンガン鉱脈があるというのは丹沢山塊のうちの塔ヶ岳の東方新大日岳(標高1341m)の山腹大日沢で、この試掘権は昭和5年から埼玉県口野町下落合563鉱山業堀井喜一氏(57)が持っている

堀井氏はその頃丹沢に金が出るという伝説をもとに約5年間試掘を行ったが金は1粒も出ず、出鉱したのはマンガン鉱であったが、埋蔵量も相当多いことが見込まれた、その上この鉱質を当局に検定して貰うと平均40%という良質なのでこれで気を取り直し当時試掘権を得て企業化しようとしたが昭和12年の戦争が勃発してついに中止、廃鉱のやむなきに至ったもので今度これを復活しようということになり去年1月現場まで約12キロある北秦野村戸川吉川金太郎さん方に事務所を設けケーブル工事に着手、操業開始の準備を進めている

なお当時掘ったものが1千トンばかり現場にあるので、これを売却して会社設立の資金の一部に当てようとしており、これを山の中から運搬する計画を立て採鉱現場山道約8キロはそり又は馬で運搬、山下の戸川まではケーブル線に依り、渋沢駅までトラックで運ぶという

この企業に対し北秦野村の有力者の一部も村の開発と遊休労力活用の意味において相当乗気となっており、鉄鋼原料のマンガンから肥料もとれるというので将来は村で自給できる肥料工場建設の計画もありこのマンガン鉱山が実現すれば丹沢山ろくの寒村は将来一躍工業地帯として躍進するものとこの話題の実現を切望している。

秦野山岳会横溝菊雄氏の話＝マンガン鉱の出ている現場は新大日岳頂上から二百メートル下の山腹付近です、併し実際に工業化して採算がとれるのでしょうか、なかなか運搬には困難なところだ

昭和26年（1951）10月16日

丹沢マンガン近く再び採掘か

中郡北秦野村戸川の丹沢鉱山は昨年から鉱山主堀井喜一氏が数年間の苦心でマンガンを発掘後、今春から夏まで数十トンを出したが、8月から種々の事情で休坑となり、13名の坑夫の賃金も不払いとなったため下山する者続出、残りの者も少なくなり廃止の運命と見られたが、一両日前からまた再開の兆候もみられ、坑夫3名も新しく来援したので再び発掘をはじめるとは注目をされている。

● ここで紹介されているのは、丹沢山塊の標高1341mを数える「新大日岳」の山腹で、山頂から約200m下がった大日沢に位置している大日鉱山です。丹沢の急峻な山腹で、なおかつ1100mを超える高所になります。

工業原料として有望視されたマンガン鉱石の運搬計画は、「採鉱現場山道約8キロはそり又は馬で運搬、山下の戸川まではケーブル線で、渋沢駅までトラック便」という複雑な運搬手段に頼らなければなりません。

現在、ネットの情報には、草に覆われた狭い坑口が紹介されています。秦野市の登山口から鉱山跡にたどり着くまでの山行は、相当な難所です。ガレ場あり、鎖・ロープを渡す崩れ場、ハイカーの登山にとって難所です。当時は、作業場に小屋が設けられ、現場に寝泊りしながら採掘にあたっていました。

高所からのマンガン鉱石の運搬は困難を極めたものと思われます。後に、この登山ルートは、渋谷書策（かいさく）氏が書策新道として改修・再整備をしました。上り詰めると、丹沢の塔ノ岳に続く尾根道にたどり着きます。書策（かいさく）氏は山小屋を営んでいましたが、2009年に93歳でお亡くなりになり、山小屋は取り壊され、今では、このルートは利用する人も少なく、整備が行き届かず、廃ルートになっていると聞きます。

● 寺田縄の北部に連なる丹沢山塊は、米作にとって重要な水源地帯です。ここで鉱物資源の開発が展開されていました。その一部を紹介いたしました。

* マンガン：鉄と合金される鉄鋼原料。マンガン鋼はマンガンの含有量により摩耗に強く特殊レールに利用される「高マンガン鋼」。張力が強く橋などの構造材料になる「低マンガン鋼」に加工される有用資源です。